



Title	アゼルバイジャンにおけるクルバン観察記
Author(s)	岩倉, 洸; IWAKURA, Ko
Citation	日本中央アジア学会報, 13, 71-76
Issue Date	2017-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.13.71
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88308
Type	journal article
File Information	JB013_015iwakura.pdf



アゼルバイジャンにおけるクルバン観察記

岩倉 洸

はじめに

本稿では2016年9月に筆者が行った、アゼルバイジャン共和国調査時に体験したクルバン・バイラム(Qurban Bayramı 以下クルバン)に関する報告を行いたい。本学会誌は旧ソ連領中央アジア、中国新疆ウイグル自治区とその周辺地域を取り扱っているものである。アゼルバイジャンを含むカフカース地域が、この周辺地域として捉えられるかは微妙なところではあるが、本学会誌が取り扱う領域と共通した点は大いにある。アゼルバイジャンに関する報告を行うことは、中央アジアなどと比較するうえでも有用だと思い、今回の報告をさせていただきたい。

筆者はアゼルバイジャンにおいて、カフカース・ムスリム宗務局⁽¹⁾(Qafqaz Müsəlmanları



写真 1 カフカース・ムスリム宗務局

İdarəsi 以下宗務局)と呼ばれる政府と近い関係にあるイスラーム組織が国内においてどのような影響力を有しているかについて研究している。この研究内容については別の機会での報告を行いたい。宗務局は政府と協力しつつも国内のイスラームについて指導や管轄をほぼ独占的に行う組織であり、当然イスラーム的な祭日に関しても指導を行っている。元々、筆者の研究は宗務局や国家が

(1) ロシア帝国時代の1872年に創設され、ソ連時代、現代まで時の政府によって、ザカフカース地域の一般のムスリムの監督と指導を任された組織。概ね政府の指導下に置かれ、政府の枠組み内でイスラームとムスリムを管理・指導してきた。現在では、アゼルバイジャン共和国領土のみを管轄している。

イスラーム的な祭日でどのような指導を行っているかという視点から始まったものであり、今回はその点も踏まえたくて報告させていただく。

まず、アゼルバイジャンにおけるクルバンに関しての概要と流れを述べた後に、気づいた点、特に宗務局や国家とも関連している点について述べていきたい。なお、今回報告するのは首都のバクーでの調査時のものである。

クルバンについて

クルバンとはクルアーンにおけるイブラヒームが息子イスマイルを神に捧げようとしたこと(クルアーン第14章 イブラヒーム章 第36節～第39節)にちなんだイスラームの祝日であり、イード・アル・アドハー、タバスキ(サハラ以南アフリカ)とも呼称される。イスラーム暦の12月10日から4日間に渡って動物を神への生贄に捧げることを中心とした祭日である。イスラーム世界の多くの地域で祝われており、ラマダン(断食月)と並ぶ重要な祭りでもある。具体的には、早朝からモスクでの礼拝、説教を行ったあと、羊や牛やラクダなどの決められた家畜を所定の方法で屠殺して分配し、それを食すことが基本的な流れとなる。

アゼルバイジャンのクルバンの流れ

アゼルバイジャンにおけるイスラームは、ソ連時代は弾圧されてきたが、ソ連崩壊以降は政治的な分野を除けば復興をしてきた。政治的な主張を持つイスラームの動きはソ連崩壊後の権威主義的な体制が確立する中で、抑制されてきた。ただし、クルバンを含むイスラーム的な祭日は国家によって、部分的に活用されてきたということを押さえておく必要がある。このことを踏まえたくて、まず筆者が経験した2016年9月12日～16日のバクーで経験したクルバンについて記述する。

滞在先のバクーの中心地のとある大学の寮に滞在していた筆者は朝7時ごろ起床し、アフガン人の留学生と一緒に、タクシーで20分ほど離れた場所にあるモスクに向かった。祝日当日のためか通りに人は殆ど見当たらない中、モスク付近は車と人でごった返しているようである。モスクで清めを行っている、中から宗務局所属のイマーム(導師)が現れて入ってくるように促す。モスクに入ってみると、その殆どはスンナ派のムスリムらしく、誰もシーア派(12イマーム派)式の礼拝を行っていなかった。とはいえ、シーア派のムスリムであるアフガン人を追い出すということはなく、既にモスクにいたアゼルバイジャン人は「同じムスリムなのだから宗派の違いなど些細なことだ」と言って、筆者達は問題なく入場すること



写真 2 モスクでのクルバン礼拝



写真 3 羊の解体場

ができた。留学生のアフガン人達と30分ほど話をしていると、別の宗務局所属イマームが入ってきて、場が静まり返る。静まり返った後、イマームは30分ほど宗派間の融和に関する説教を、クルアーンを引用しつつ行っていく。続いて、イマームはシーア派至上主義の国への批判⁽²⁾を行い、それが終わると「アッラーフ・アクバル」とタクビールから礼拝を行ってゆく。

集団礼拝が終わると、人々は個人でなおも礼拝を続けたり、家の帰路に就くなど思い思いの行動をはじめ。筆者がアフガン人達と一緒に、モスクの敷地を出ると、羊の解体作業があらゆる場所で行われていた。バクーという大都市圏の中心であっても解体が禁じられていないことに、公衆衛生の観点から驚きを覚えたが、解体人曰く解体場所は無造作に設置されているわけではないらしく、「水がある場所、内臓や毛皮がすぐに処分できる場所、羊を囲う柵または見張りがいる場所、交通の邪魔にならない場所、この4点を満たしていなければ設置できない」とのことであった。

その羊の解体作業を見ていくと以下のようなプロセスが見られた。①羊を選ぶ②選んだ羊の足を3本だけ縛っておく。その際、できるのであれば頭の向きはマッカの方向に向けておく③ピスミッター⁽³⁾と唱えながら首を掻き切って首からの血抜きを行う。この血抜きは羊が動かなくなるまで行われる④動かなくなったら、羊を吊るして頭と足を切り落とす⑤毛皮を剥がす⑥内臓を取り出す⑦包丁で細かく部位ごとに分ける。⑧切り分けられた肉を売る。基本的には肉屋がこの作業を行っているが、これは都市居住者を中心とする現代のアゼルバイジャン人にとって肉の解体作業が非常に困難であるためである。ただし、地方出身者など

(2) 明示はされていないが、イランだと思われる。イランとアゼルバイジャンはイスラエルの関係、イスラーム主義の問題、南北のアゼルバイジャン人の問題から緊張関係にある。

(3) アッラーの御名においてという意味のアラビア語。イスラーム的な儀礼の冒頭に唱えたり、あるいは手紙など最上部に書くなど物事の始まりにしばしば使用される。



写真4 解体場近くで羊を車に押し込める人々

一部の人々は自力で解体ができるため、羊を車のトランクに乗せて自宅に持ち帰るようである。アゼルバイジャンにおいては、牛やラクダなどがクルバンの際の犠牲として推奨されているが、解体場所の手間などを考えると牛より羊の方が楽しく、羊の解体場がきわめて多い。

こうして解体された肉は、基本的には元々予約していた人に優先的に配られるが、予約をしていなくてもいくら

か羊に余裕があるらしく、当日受付の分も存在している。予約分は既に支払われているので、その値段は知ることはできないが、当日分は羊1頭で300アゼルバイジャン・マナト⁽⁴⁾くらいから販売されている。また、丸々1頭分だけでなく、部位ごとにも売られている。自身で解体したり、このような解体場所で手に入れる以外にはスーパーや肉屋で「クルバン用」とされた牛肉や羊肉も購入もできる。一部の人々はこうした入手方法を邪道と捉えているが、バクーでは利便性からこれを代わりに入手する人も少なからずいるようである。

さて、伝統的にはこのように手に入れた肉は1/3ずつ自身、近所、貧者に分けられるとされている。しかし、現代アゼルバイジャンでは、宗教組織やNPOがプロフを配る形があるが、個人が貧者に肉そのものを直接与えることはあまり見受けられない。基本的には近所の人同士である程度交換し、自宅で解体した肉を使った料理を食するのが基本的なスタイルのようである。実際、筆者が当時滞在していたバクーのとある地域で、アゼルバイジャン人にクルバン用の肉を渡すと、アゼルバイジャンの人々もその量と同じだけの肉を渡してくれた。このように朝早くからの礼拝と生贄に捧げ、解体した肉を食する行為が9月12日から4日間続いていく。

アゼルバイジャンにおけるクルバンの特徴

● 国家による規制

アゼルバイジャンは旧ソ連時代政府によってイスラーム弾圧・監視が行われた地域であり、現在でも政府によってイスラームは政治の枠組み内で動くように監視されている。クルバン

(4) 2016年9月1日時点でのレート(1アゼルバイジャン・マナト=74.8円)では約22440円相当にあたる。

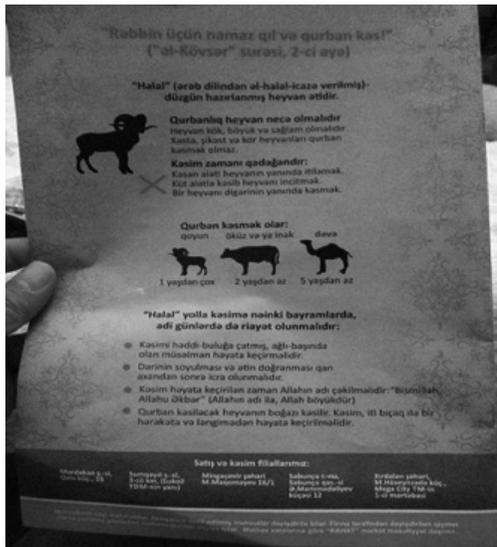


写真5 クルバンに関するパンフレット

あった。筆者もパスポートを見せるように要求され、ロシア語で入国の目的や入国してから何をしているかを質問された。全てのモスクで、このような監視が実行されていたかは不明だが、宗務局の幹部へインタビューしたところ、少なくとも政府が認知しているモスクでは全て実行されていたようである。2つめは肉の解体についてである。イスラーム世界の一部地域では都市部における解体が禁止されている。アゼルバイジャンではそこまでの規制が掛かっているわけではないが、解体場の設置には一定の規制がかかっている。3点目はクルバンに関して正しい犠牲の捧げ方とされるものを、宗務局が民間のパンフレットの校閲などを通じて伝達している点である。これによって、人々に政府が望むクルバンのやり方を提示している。

● 人々のクルバンに対する意識

アゼルバイジャンの人々は当然、クルバンをイスラーム的な祝日だと認識している。しかし、アゼルバイジャンの外から来た人々（特に旧ソ連地域外のアラビア半島やアフガニスタンの出身者など）から見れば、アゼルバイジャン人はクルバンを、肉を食すイベントに墮落させていると感じている場合もあるようである。特に、このような認識の差は解体場で見られる。例えば、動物の首を切るときはビスミッターと唱えながら行うのが普通である。これは神に捧げるという元々の由来を考えれば至極当然のことである。しかし、筆者が見てきた解体ではなぜかビスミッターと唱えずに首元を掻き切るケースが多く見られた。

これに関して、アゼルバイジャン外から来た留学生がそのやり方はイスラーム的ではない

においても政府により規制されている場面が見られた。

クルバンにおいてこのことが強く感じられたのは、以下の3点である。1つはモスクでの礼拝や説教についてである。モスクの後ろにスーツを着てメモを持ち、礼拝説教の内容のみならずモスク全体を監視している人が1～2人いた。これらの人々は政府の機関であり、国内の宗教問題を取り扱う宗教団体協力国家委員会 (Azərbaycan Respublikasının Dini Qurumlarla İş üzrə Dövlət Komitəsi) の役人ないしその協力者であった。モスクの説教や参加者が、反政府的なものでないかを確認しているよう

と批判しているところを筆者は見かけたが、多くのアゼルバイジャン人は「何を言っているんだ」という目で見ていただけだった。後に、その解体人に話を聞いてみると「ビスミッターと言いながら首を切っていたら、(羊が暴れて)切るタイミングを逃しちゃうことが多いからな。たくさんの人が予約しているから効率的に素早く切らないといつまでたっても仕事は終わらねえ。きっと、預言者も神もタキーヤ⁽⁵⁾で許してくれるさ」という返事があった。イスラーム的なことを否定しているわけではないものの、肉を配ることで近所、親戚、友人、家族などとの繋がりを再確認するというところに、より重点的な価値をおいていることが伺える。

結びに

ソ連崩壊以降、アゼルバイジャンではイスラーム復興が進んでいるのは事実である。ソ連時代であれば、外部の研究者がクルバンを観察することさえ困難であっただろう。しかし、アゼルバイジャンにおけるイスラーム復興は無制限に行われているものではなく、政府による一定程度の規制がある。これは、ソ連時代のような宗教弾圧というわけではない。政府は国家を纏めるものとして世俗主義やナショナリズムを盛んに宣伝しているが、近年高まるイスラーム復興を念頭に、イスラームはそれらを補強するものとして部分的に活用されている。特に、クルバンなどのイスラーム的な祭日は政府主導のイスラームを宣伝するチャンスであるため、モスクの説教やテレビなどではイスラームと政府の繋がりが強調されている。もっとも、政府の管理イスラームを超えるような動きがでないように監視は行われている。

今後、アゼルバイジャンにおけるイスラームと国家の関係、そして人々のイスラームとの関わりがどのように変わっていくのか注意して見ていく必要があるだろう。

なお、このアゼルバイジャンにおけるフィールドワークは京都大学臨地教育国際連携支援室の平成28年度のエクスペローラープログラムによって実現した。ここに改めて感謝の意を表す。

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

⁽⁵⁾ 本来的には、自身や家族の生命、財産、名誉、共同体の危険時に自らの信仰を秘匿すること。アゼルバイジャンの主流派である12イマーム派において積極的に説かれている教義であるが、筆者が見る限りではイスラーム的ではない行動をした言い訳に多く使用されている。